



なんでやねん

発行責任者 倉橋 忠



No.28

たてあなじゅうきょ 竪穴住居から縄文時代の人の知恵を探ろう

2学期の初めに、縄文時代の住居を通して、人々の暮らしを考えてみよう。みんな(グループ)で取り組む課題は、次の課題だ。縄文時代に生きているとして考えよう。

- ① 建物を建てる時に必要な物は、どんな物？ (材料と道具を考えよう)
- ② ^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物は、どうすれば建てられるか？ (家の建て方)
- ③ どんな知識が必要なんだろうか？ (思いつきでは無理)
- ④ ^{たてあな}竪穴住居は、どれ位の人数で建てることができるのだろうか？ (何人?)
- ⑤ 力を合わせるには、何が必要なのか？ (団結するために必要なこと)

今回の「なんでやねん」では、上の課題を考えるための基礎知識を伝えておこう。

移動生活をしていた旧石器時代の住居は、今日のテントのような物だったと考えられている。数本の柱を立てて上部をくくりつけて、草や木の皮でおおう簡単な住居だったと言われる。ただ、この考え方には、私(倉橋)は疑問を持っている。なぜなら、氷期の旧石器時代にそんな住居で耐えることができたのか、とても不思議だからだ。

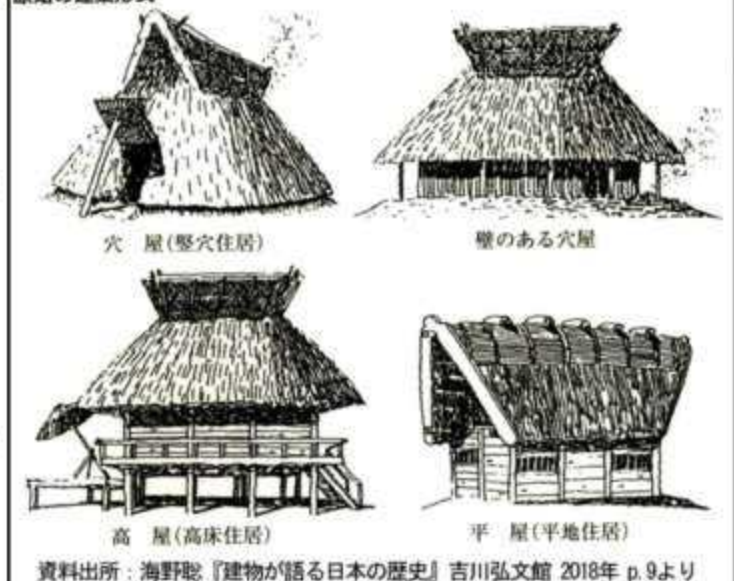
さて、時代が進んで、縄文時代。この時代に入ると定住生活が始まった。遺跡からは、^{ゆか}床を高くした^{たかゆかしき}高床式の掘立柱建物や、^{どうくつ}洞窟のような^{よこあなじゅうきょ}横穴住居も発見される。しかし、発掘されている日本の原始時代の住居の大半は竪穴住居である。

縄文時代の住居は、^{へいちじゅうきょ}平地住居か竪穴住居だったと考えられている。

平地住居は、地面をそのまま^{ゆか}床にした建物で、地面に穴を掘り柱を立てて建てる。掘立柱建物の簡単な作りだ。ただし、後の時代(古墳時代など)の掘立柱建物は巨大な建物が多い。

それに対して、竪穴住居は手が込んでいる。50cmから1m位の深さまで地面を掘り下げて^{ゆかめん}床面を作る。さらに、その床面を掘って穴をあけ柱を立てる。言わば、竪穴住居は、穴を掘り下げた地面に平地住居を建てる建物である。

原始の建築形式



資料出所：海野聡『建物が語る日本の歴史』吉川弘文館 2018年 p.9より

竪穴住居はどんな構造になっているのだろう

① 木材で柱や梁などを組む

一般的に見られる構造は、4本の柱を立てる伏屋式と呼ばれる建て方である。穴に柱(主柱)を立て、立てた柱の上に梁と桁を置き、その上に扱首・棟木を組み、垂木をかけて、屋根を葺く。



資料出所：海野聡『建物語る日本の歴史』吉川弘文館 2018年 p.13より

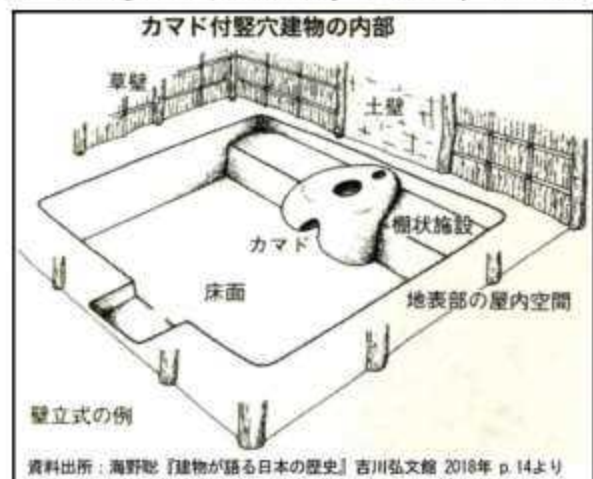
② 屋根を何で葺いたのか

長い間、竪穴住居の屋根は、かや^{*}などで屋根を葺いた草屋根の建物と考えられていた。しかし、岩手県一戸町御所野遺跡や、富山県小矢部市桜町遺跡で、竪穴住居の柱がそのまま発見されたり、火事で焼けた住居が発掘されて、炭になった柱や垂木が発見され、次第に住居の屋根の構造がわかるようになった。

研究の結果、縄文時代の竪穴住居の屋根には、土がかぶせられていたということが明らかにされた。現在、土屋根の竪穴住居は、岩手県一戸町御所野遺跡、北海道虻田町入江貝塚、富山県富山市北代遺跡の3遺跡で復元されている。

③ 竪穴住居の住み心地は快適だったか

半分以上が土の中に居住空間のある竪穴住居の住み心地はどうだったのだろうか。内部は、そのまま湿度が90%以上もあり、柱などの木も腐りやすく、クモが巣を張ったりする。ジメジメしていて快適とは言えない。しかし、炉で火を焚くと、湿度が60から70%まで下がるので、やや過ごしやすいと言われる。炉の煙は、木に虫がついたりクモやカビの発生を食い止める「燻蒸(くんじょう)」効果を持っている。おそらく縄文人もこのような工夫をしたのであろう。



壁立式の例
資料出所：海野聡『建物語る日本の歴史』吉川弘文館 2018年 p.14より

また住居の中の温度は、極寒期をのぞき、ほぼ15~20℃で一定している。特に真夏の昼間は、外気温より10℃くらい低くなり、暑さをしのぐにはもってこいの環境になる。土屋根住居の特性を縄文人はうまく利用して、過ごしやすい住環境を整えていたと考えられる²。

*1 ススキなどの植物(草)のこと。

*2 竪穴住居の住み心地については、富山市埋蔵文化財センター「北代縄文広場」hpを参考にした。